



# 教皇様の敵

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済 ©1988  
発行所  
財団法人 精道教育促進協会  
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6  
☎(0797)31-3452

## 死と墓の彼方から

「……後にならぬかはまだ示されていない。(ヨハネ①3・2)

今日の詩篇を読むと私たちの心は地上に向かいます。「地とそこにあるもの、世とそこに住むもの、すべて主のもの。主は地の基を水の上におき、流れの上になすえた。」(詩篇23④・1〜2)

今日、そして特に明日、私たちはこの地上を人間の生命と死の空間として眺めます。亡くなった全ての信者を記念する今日、とくに気づくことがあります。それは、地上は人々が休息している墓で覆われている、ということ。人祖アダムに創造主が宣言された御言葉の真理が、世から世代へと再確認されるのです。「あなたはちりであり、ちりにかえらねばならない。」(創世記3・19)

「……後にならぬかはまだ示されていない。(ヨハネ①3・2)

私たちが言います、「地とそこにあるものは全て主のもの」——地は人間の支配下にある多くの富に満ちていることを私たちは知っています。にもかかわらず、地上における人間の支配権の前途には、必ずやってくる死による中断を避ける方法はありません。

第二バテイカン公会議は、現代世界における人間の立場についての多方面にわたる記述の終わりに、次の問いを提起しています。「人間とは何か。偉大な進歩にもかかわらず今なお残っている苦しみが、死の意味は何か。大きな犠牲を払って獲得した勝利はなんのためになったか。人間は社会に何をもちたすことができるか。社会から何が期待できるか。この地上生活の後に何が続くか。」

### 神の御顔を求める

「……後にならぬかはまだ示されていない。(ヨハネ①3・2)

詩篇は、人間を地上に降る存在としてではなく、神に向かつて「昇る」存在として示しています。実際に詩篇は問いかけています。「誰が主の山に登れよう?」

「誰がその聖所に立てよう? それは手の清く、心の純な者、魂が悪にひかれなかった者。」(詩篇23④・3〜4)

これに関連して、死を越えて墓の彼方でのぼるこの呼び声は何でしょう。そして人間は、それをどのように聞くのでしょうか? それは真理と善の呼び声、良心と自由の挑戦、愛の挑戦なのです。この呼び声は結局のところ、「神の御顔を求めること」でした。(詩篇23④・6参照)

人間は、自分が地上で実現させる仕事を通して決定的な正義を求め、「神の祝福とその救い」を求める(5節)ばかりでなく、神御自身を求めます。

「それは主を求めめる者の族、御顔を求むる人々、あやコブの神よ。」(6節)

今日、私たちはこの沢山の墓に囲まれています。数えきれぬほどの昔のローマの住人たちが、

この墓地に死後の休息の場を見つけました。

この墓群の中に立っていますと、今日も、明日も、生きている人々が死者と出会うすべての墓所に思いを馳せることができます。

墓所に立てば、死ねば墓に入る存在としての人間についての真理が再確認されます。

けれども、この同じ場所において教会は、神に向かつて「昇る」存在として、「神の御顔を求めている」存在としての人間についての真理を教え聞かせます。

御顔を求めていると、「地は、主のもの……」という詩篇の言葉が決定的に実現しているのがわかります。全く! 地は主のもので、そして主は地を人間のために、主に向かつて昇っていく場所としてお創りになったのです。

主に愛された使徒聖ヨハネは書いています。「考えよ、神の子と称されるほど御父から計りがたい愛をうけたことを。私たちは神の子である。」(ヨハネ①3・1)

そして、イエズス・キリストにおいて私たちが神の子であるという事実は、私たちが神に向かつて昇るための決定的な理由となっています。息子や娘である私たちが御父の家を探さずいられるのでしょうか? 父の御顔を求めずいられるのでしょうか?

聖ヨハネは続けて書いています。「愛する者たちよ、私たちはいま神の子である。後にならぬか、まだ示されていない。」(ヨハネ①3・2)

「まだ……」。世界中の全ての墓や墓地は何なのでしょう? 墓も墓地も「まだ」の場所です。しかし、この「まだ」の意味は、終わりでなく、失望でもありません。世界中の墓も墓地も待合室です。

使徒聖ヨハネは書いています。「神が現われる時、私たちは神に似たものになることを知っている。私たちは、神をそのまま見るであろうから。」(前出)

従って、その時、全人類存在の歴史を通して、人間の生と死を通して、創世記の第一頁が語る神の似姿の秘義が、創られた全世界の歴史の中に現われ出るのである。

「人間……神の似姿。」(創世記1・27参照)

「私たちは神に似たものとなる。」「私たちは神をそのまま見るであろう。」

そのために死者の墓の傍で、光をくださるよう、主に願いまし。地上の人生の巡礼の道を行くとき、私たちにはこの光がありません。ここでは神の御顔が見えません。信仰によって進むのです。

信仰によるこの世の巡礼をすでに終えた人々の上には、「永遠の光」が輝いています。この光の下で彼らが神を「そのまま」見ることができま

すように。「近づけぬ光のうちに住まわれる」(ティモテオ①6・16) 主の御顔が、彼らに近づきやすくなりますように。神の栄光が彼らを抱きしめ、彼らに浸透しますように。(十一・二)

# 堅信 聖霊のみわざ

復活節はキリストの地上から  
の立出の時期でもあります。

使徒行録にも書かれているように、  
キリストは復活の四十日後天に昇ら  
れました。(使徒行録1・9参照)そ  
して使徒達はオリブ山からエルサ  
レムに戻り、聖母マリアと共に熱心  
に祈りを捧げたのです。(使徒行録1  
12、14参照)

キリストの昇天にあたり、キリス  
トの来臨も約束されています。「私  
はあなたたちを孤児にしてはおかな  
い、ふたたび帰ってくる」(ヨハネ14  
18)、「ふたたび私に会うとき、あな  
たたちの心は喜ぶ」(ヨハネ16・22)  
とキリストはおっしゃっています。

この言葉は聖霊降臨の日に確認さ  
れます。キリストは聖霊の力のうち  
に戻ってこられるのです。聖霊の内  
に来られるのです。主は目には見え  
なくても新たに降臨され、弟子たち  
の心に入り込まれます。この日、自  
らの中に見出す光と力とを通して弟  
子たちは、キリストが自らの内にお  
られることを感じるのです。

聖霊の力におけるキリストの  
来臨が教会の全生活の原理と  
なり、秘跡の中に表わされるのは、  
この日からのことです。

洗礼の秘跡は再生であり、水と聖  
霊による新しい誕生を意味していま  
す。(ヨハネ3・5参照)それはパウ

ロが教えるように、洗礼を通して私  
たちは人々を救うキリストの死と復  
活に与るからです。私たちはキリス  
トと共に、神の内に昇天するため  
キリストと共に死ぬのです。これは  
私たち一人ひとりにおける復活の秘  
義の霊的な実現であり、キリストの  
死から生への「超越」に従った私  
たちの聖なる生命への再生なのです。

キリストの復活が聖霊降臨にお  
いて完成されるように、洗礼は堅信に  
あつて完成されます。洗礼を受けた  
人の内に、聖霊の業である堅信の秘  
跡を通して完全な信仰が確認されま  
す。そしてこの信仰は聖霊降臨の日、  
弟子たちが示したのと同じものです。

今日堅信を受ける皆さんは、  
司教の唱える、皆さんのため  
の祈りに心を留めてください。

「全能の神、主イエズス・キリス  
トの父よ、あなたは水と聖霊によつて  
この人々に新しいいのちを与え、罪  
から解放してくださいました。今、  
この人々の上に助け主である聖霊を  
送って(…)ください。」(「堅信式」  
25番)そしてキリストが受難の前夜、  
高間で「彼らのために祈ります」(ヨ  
ハネ17・9)と祈られたように、皆  
さんのために神に祈られるのはキリス  
ト御自身であることを心に留めて  
ください。

キリストは世を去るにあたり、弟

子たちと、共にいた人々、また世の  
終わりまで主に従う全ての人々のた  
めに祈られたのでした。「彼らの言  
葉によって私を信じる人々のために  
も祈ります」(ヨハネ17・20)と。  
今、述べた事を心に留めて今日の  
堅信の秘跡を受けてください。ま  
まなく受けられる塗油によって、皆  
さんは司祭のキリストへの祈り、世  
々に続く祈りの中に加えられます。

堅信の秘跡の証人が皆さんの肩  
手を置きますが、これは教会で続  
いている信仰と証を表わす動作です。  
ですから皆さんも信仰において強め  
られなければなりません。使徒たち  
が聖霊降臨の日にしたように、皆  
さんも十字架にかけられ昇天したキリス  
トの証人とならなければなりません。  
それはキリストの真理において  
強められることであり、他の人々を  
も強くすることができるのです。

イエズス・キリストは死と復  
活を通して「万民を治める力」  
(ヨハネ17・2参照)を有してお  
られます。これは世俗的な力ではあり  
ません。キリストの王国は世俗的な  
尺度で測ることができないからです。  
神が委ねられた全ての人々に「永遠  
の命を与えるために」、「天と地のい  
さいの権威」(マテオ28・18参照)が  
イエズス・キリストに与えられたの  
は、人々を救うための従順と御父へ  
の完全な献身によるのです。

堅信の秘跡を受ける皆さんは、贖  
い主なるキリストに委ねられます。  
そしてキリストは、神から託された  
全てを皆さん一人ひとりに委ねたい  
と願っておられます。教会が始ま  
った頃、使徒たちに向かってなされた

のと同じく、教会の歴史の中で私  
たちに命が与えられた今、キリストは  
永遠の命の言葉を託されるのです。  
「永遠の命とは、唯一のまことの神  
であるあなたと、あなたの遣わされ  
たイエズス・キリストを知ること  
であります。」(ヨハネ17・3)

この世での生活における様々な状  
況の真つ只中であなただがすべきキリス  
トの証とは、神の内にある永遠の  
命の地上における始まりであるとい  
うことです。そして十字架とキリス  
トの復活を通して神の永遠の命へと  
召されるのです。

教会は、キリストの御旨に従  
い、この永遠の命の始まりを

「罪を除いてすべてを私たち  
と同様に味わわれた」これが前回  
のテーマでした。(…)

キリストが全く罪を犯さない御方  
であったことは、地上における御生  
活と使命の全容が証明しています。  
キリストは、「私に罪があると確認で  
きる人がいるか」(ヨハネ8・46)と  
お尋ねになりました。「罪のない」  
人、イエズス・キリストは、全生涯に  
わたり、罪と罪に陥れるすべてのも  
のに対して戦われました。人類の歴  
史の「始めから」その父」であつ  
たサタン(ヨハネ8・44参照)との

戦いでした。この戦いは救い主とし  
ての使命の出発点で、悪魔の試みに  
始まり(マルコ1・13他参照)十字  
架と復活において最高潮に達します。  
それは勝利に終わる戦いでした。  
2 罪とその根源との戦いによつ  
て、イエズスは人間一人ひとり  
ることなく、反対に人間一人ひとり  
に近づかれました。地上での御生活  
中、イエズスは皆から罪人と思われ  
ていた人々の近くにいることを何度  
も示されました。福音書には、これ  
が多く記されています。

3 この点から見れば、イエズス  
が示された御自身とヨハネと

## 全人類と 連帯するキリスト キリストシリーズ ⑬



# 説教・講話・書簡等の抄記

の比較はとても意義深いものです。「ヨハネが来て飲み食いしない」といふの男は悪魔につかれていふ」といふ、人の子が来て飲み食いすれば、「大食漢、酒飲み、税吏と罪人の仲間だ」と言う。(マテオ11・18) イエズスはこう言われました。この言葉の論争的性格は、人々の態度に明らかに表われています。人々は、ヨルダン川で洗礼を受けていた預言者、厳しい修行者、洗礼者ヨハネを非難し、次いで人々の間で活動し、働かれたイエズスを非難しました。しか



「諸聖人の祝日を主において喜びましょう。」

今日、神の光のもとで、「諸聖人の元后」なる教会の御母と、天国において勝利の教会に加わっている全ての人々を記念し祝うことは、新たな喜びに満たされることです。

私たちは聖母を崇敬しています。聖母は謙遜で寡黙の方で、この世では神の御旨を絶え間なく成し遂げるために生き、今は天使、聖人の中で神の賛美をうけておられます。

また、この地上ではキリストの証人となり、今は天国の栄光の中に至福直観を享受している兄弟姉妹を私たちは敬います。

地上の巡礼の道を歩む時、いつても「はい」と言えるにはどうしたらよいかを御存じであった「主のはしめ」を、そして今、全被造物よりも高められた御方、天国へのあらゆる道を示してくださいる聖母と共に喜びましょう。

しこれらの言葉には、罪人に対するイエズスの態度と気持、振舞がよく表われています。

4 イエズスは、罪人や税吏の仲間だと非難されました。(税吏は搾取を働き、法を守らない者と見なされていた。マテオ5・46、9・11、18・17参照)しかし、その非難を否定されませんでした。それが事実であることは、福音書に記された多くのエピソードが確認しています。

ただし、イエズスは知らぬ顔をし、沈黙されたという様子は全く見られ

私たちに先立って、流刑から故国へと同じ道をたどった大勢の兄弟姉妹と共に喜びましょう。



明日十一月二日は、今一度、時の境界線を越え眼を上げて祈りの内に愛する死者たちと出会う日です。今夜私はベラーノの墓地で聖体祭儀をとり行ない、私たちより先に故国へと旅立った世界中の全ての人々のために、聖なる犠牲を捧げ

## 諸聖人の元后

ます。彼らのことを思い出し、主が「休息と光と平和」をお与えくださるよう祈ります。

人々の邪悪によって、不正、虐待、暴力によって、あるいは天災に遭って地上の生涯を閉じた全ての人を思い出しましょう。愛深い御父である神が、この兄弟姉妹皆に永遠の喜びと平和とお与えくださるよう祈り

ません。ザケオの場合、イエズス御自身が彼の家に泊まることを望まれました。「ザケオ、早く下りよ。」ザケオは背が低いため、イエズスを見ようと木に登っていた。「私は今日あなたの家に泊まる」と。そして喜んで飛び降りイエズスを迎えたザケオに、「今日この家に救いが来た。この人もアブラハムの子である。人の子は見失ったものを尋ねて救うために来た」と言われました。(ルカ19・1-10参照) この出来事を見ると、イエズスが、税吏や罪人と親しく接

ましよう。



皆さんは墓地を訪れて亡くなった方々を偲び、愛は死を越えて続いていることを示してください。花とローソクを持って行くだけでなく、特に「聖徒のまじわり」の精神で、慰めと助けの祈りを携えて行きましょう。

亡くなった愛する人々から、私たちは確信と希望の言葉を受け取ります。すなわち、死によって

「生命は変わるけれども終わりはしない。地上の住居にいた体が死んで横たわるとき、私たちは天国で永遠に続く住居を得るのだ。」

カトリック信仰のこの真理を公言しながら、至聖なる乙女、救い主の御母にして私たちの母なる聖母に心を向けましょう。聖母が私たちの死を向けましょう。聖母が私たちの死のために取りなしてください、私たち一人ひとりに寄り添ってくださいますように。聖母は「苦しむ者の慰め、希望の御母、諸聖人の元后」なのです。(十一・一)

すると同時に、彼らの救いを望まれたことがわかります。

5 アルフェオの子レビにも同じような出来事がありました。

この人の場合は特に深い意味があります。イエズスはレビが「収税所に座っているのをごらんになって、弟子にするため「私について来い」と呼びかけられました。すると彼は立ち上がったって行きました。この人は十二人の弟子の一人マテオのことで、福音書の著者であることはよく知られています。福音史家マルコは、イエズスが「彼の家で食卓につかれた」こと、そして「多くの税吏や罪人もイエズスや弟子たちと同じ席についていた」ことを記していますが、(マルコ2・13-15参照)この時にも「ファリサイ派の律法士たち」は弟子たちに抗議します。するとイエズスは「医者が要るのは健康な人ではなく病人である。義人ではなく罪人を招くために私は来た」(マルコ2・17)と言われたのです。

6 「税吏や罪人」を含む人々と共に食卓につくことは、救い主としてのお働きの始めからイエズスの内に見られた人情味あふれる振舞でした。救い主としての御力を示された最初の出来事は、ガリラヤのカナでの婚宴の席においてでした。その時イエズスは、御母と弟子たちと共に宴席におられたのです。(ヨハネ2・1-12参照) それから後も、たびたび会食の招きを受けられました。税吏ばかりでなく、最も激しい反対者であったファリサイ人からでもあります。「あるファリサイ人とともに食事をしてくれるようにイエズスを

招いたので、イエズスはその家に引き、食卓につかれた」(ルカ7・36)とルカは記しています。

7 「義人」とみなされていた人々によって軽蔑され、責められていた多くの「罪人」を含むあわれむべき人々に対してイエズスが取られた態度に新たな光明を投じることが、食事の席上で起こりました。町で罪女とうわさのある女が人々の中にいたのです。女は泣きながらイエズスの御足に口づけし、香油を塗りました。イエズスと主人の間で論議が交わされ、イエズスは、罪の赦しと信仰による愛の深いつながりを示されます。「その多くの罪はゆるされた。多く愛したのだから……: それから女に向かい、「あなたの罪はゆるされた……あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい」と言われた。(ルカ7・36-50参照)

8 他にもあります。その一つはある意味で一層劇的な事件でした。「姦通で捕えられた女」のことです。(ヨハネ8・1-11参照)前述の出来事同様、ここにおいてもイエズスがどういう意味で「税吏と罪人の仲間」であるかが示されています。イエズスは女に言われました。「行け、これからはもう罪を犯さぬように」(ヨハネ8・11)と。「罪を除いてすべて私たちと同じであった」イエズスが、罪人を罪から解放するために、彼らの近くにおられたことが示されています。旧約の律法のもとで罪人と判断されていた人々に対して取られていた厳しさと異なり、全く「新しい」方法で、救い主としての目的を達しておられたのです。

# 不変の教え

全ての人の向けられた偉大な愛の心でイエズスは働かれました。それは神に似せて創られた人間(創世1・27、5・1)との深い一致(連帯)に基づくものでした。

9 この一致(連帯)は何によるのでしよう。それは、神の内にある愛の現われです。神の御子はこの愛を示すためにこの世にいられた。御子が人、私たちの一人に

なられたことによつてすでにそれは明らかです。真の人イエズス・キリストが、人性において私たちと結びつかれたことは、御子と全人類との一致(連帯)の現われです。それは一人ひとりを愛してくださる神の愛を雄弁に語っているからです。ここで全く特別の方法で愛が確認されています。愛する人は愛する者と全てを分かちあうことを望むものです。神の御子が人間となられたのはこのためでした。「実に彼は私たちの労苦を背負い、私たちの苦しみを担った」(マテオ8・17参照、イザヤ53・4)とイザヤは御子について預言しました。イエズスは全ての息子、娘と共に同じ条件を味わわれました。ここでもイエズスは、一人ひとり全ての人間の尊厳を示されました。御託身(受肉)は人間と人類のすばらしい「再評価」と言えるでしょう。

高なる犠牲に至るまでのイエズスの地上の生活は、人類との一致(連帯)の多様な現われでした。次のイエズスの言葉がそれを要約しています。「人の子が来たのは仕えられるためではなく仕えるためであり、多くの人があがないとして自分の命を与えるためである」(マルコ10・45) イエズスは全ての子供と同様に子供でした。ナザレトのヨセフのそばで、誰もがするように働かれました。「働くことについて」(26参照) イエズスはイスラエルの子でした。その民の文化、伝統、希望、苦しみを共に味わわれました。使命に召された人の生活によく起こることも経験されました。使命遂行のために自ら選んだ使徒の一人に裏切られたのです。これによって、深い悲しみを味わわれました。(ヨハネ13・21参照)

「多くの人のあがないとして自分の命を与える」(マテオ20・28) 時が近づいたとき、自ら進んでそうなさいました。(ヨハネ10・18参照) こうして、犠牲というかたちで一致(連帯)の秘義を完了されました。ローマ総督が集まった告訴人の前で「見よこの人を」(ヨハネ19・5)という以外の言葉を見出せませんでした。秘義に気づかなくても、その瞬間に感じられたイエズスの引きつける力に無感覚ではいらなかった異教徒のこの言葉は、キリストの人間としての現実についての全てを語っています。イエズスは人間、真の人間でした。罪を除いて全て私たちと同じであったイエズスは、罪のいけにえとなられ、十字架の死に至るまで全てと一致してくださったのです。

## 与えられ 与えるための ルルド

本日私は、皆さんにガヴウ川のほとりにあるルルドの聖所について考えていただきたいと思ひます。聖母マリアは一八五八年ルルドに姿を現わし、特に罪人のため償いと祈りを求められました。

多くの巡礼者の目的地であるこの大いなる聖母マリアの聖所は私たちに二つの事について語りかけています。無原罪の御宿りの秘義と、人間の肉体と精神両面の苦痛を軽くするために捧げられた慈悲にあふれる愛についてです。この二つはきわめて密接な関係にあります。

を通して驚くほど豊かな恩寵が人類に与えられます。聖母マリアがおられる所には恩寵が満ち、人々は肉体も靈魂も癒されるのです。一九八三年のルルドへの巡礼の時申し上げた通りです。「ルルドで私たちは生命への愛とは何かを知ることができま

す。洞窟の中で、また病院において、病める人々に助けが与えられています。上にある告解の聖堂では、あらゆる心の悩みに耳を傾け、キリストの慰めにあふれた赦しを与えるという形で生命への愛が表われています」(地下の聖堂での若者たちへの講話、一九八三年八月一日)

それゆえ、人々は内的な恩寵や神の思召しによる肉体的な癒しを単に受けるだけでなく、与えるため、与える覚悟をするためにルルドに赴くのです。この世の救いのためにもっと喜んでもっと懸命に働くためなのです。ルルドで私たちはベルナデッタの示した模範、彼女の進んで事にあたる様子、素直さ、謙遜、勇気を学ばなければなりません。このような徳をもっていたからこそ、犠牲が要

求される状況の中で、神が聖母マリアを通じてベルナデッタ自身のために、また彼女の隣人のために、そしてまた全人類のために下されたお告げを彼女は聞くことができたのです。ローレンス司教が一八六二年にこの神秘的出来事を正式に認めてから、教会はマッサビエルの聖母のお告げを教会自体に向けられたものとみなしてきました。この事はさらにピオ九世以降の私の先駆者すべてがルルドの聖所に捧げてきた特別な信心によつても証明されます。ですから皆さんもお気づきのよう、かなり前よりパティカン庭にはルルドの洞窟の複製が設けられています。ルルドですべて述べた言葉ですが、ここで繰り返して言わせていただきます。「この洞窟を前にして祈れるのはよろこばしいことです。毎年二月十一日、私は聖ペトロ大聖堂で病める人のミサをたてています。フランスのカトリック信者への講話) ルルドの汚れなき乙女よ、苦難と試験の時に私たちのそばにいてください! 御身の美しさの神秘について黙想する私たちが、御子キリストの功徳によつて罪を赦されますように。アーメン! (六・一九)

10 肉体的、精神的な重荷のもとで苦しむ人々に対するこの「愛と連帯」は、人の子の地上での全生活と使命の中で特に際立つ特徴です。生涯の終わりに御子は、多くの人のあがないとして御自分の命をお与えになりました。(マルコ10・45参照) 十字架における贖いの犠牲です。至

に感じられたイエズスの引きつける力に無感覚ではいらなかった異教徒のこの言葉は、キリストの人間としての現実についての全てを語っています。イエズスは人間、真の人間でした。罪を除いて全て私たちと同じであったイエズスは、罪のいけにえとなられ、十字架の死に至るまで全てと一致してくださったのです。

ですから聖母マリアはキリストの贖いのすぐれた、また唯一の担い手なのです。キリストの恩寵を授けるための大いなる特権を与えられた道であり、この選ばれた道

『教皇様の声』ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説しながら、そのまま伝える月刊紙。毎月 十日発行。定価 一部七十円送料四十円。一年予約八〇〇円送料五〇〇円。二十部以上の一括購入なら送料不要。

**ヨハネ・パウロ二世 教皇様の声**  
年間購読者募集中 (1月~12月)

日曜日ごとの「お告げの祈り」の時や水曜日ごとの一般謁見の時を始め教皇さまは、あらゆる機会をとらえて教えを伝えておられます。本紙は、ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのままわかり易い日本語に訳して伝える月刊紙です。

年間購読申込要領

- 教会でまとめて、お申込みの場合  
教会で2部以上まとめてお申込みになると送料が無料になります。年間購読料は800円です。教会名・ご担当者名・部数を明記の上、お申してください。
- 個人で直接お申込みの場合  
1,300円(年間購読料800円+送料500円)を郵便振替にてお送り下さい。

見本紙は40円切手同封の上、ご請求ください。

財団法人 精道教育促進協会  
〒659 兵庫県芦屋市船町12-6 ☎0797-31-3452